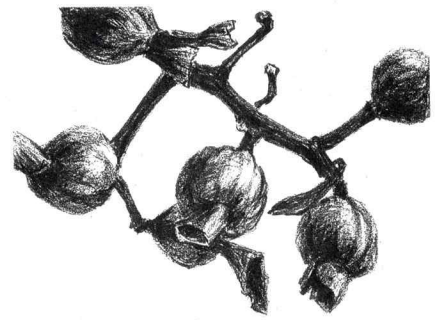


# 朝日 俳壇 歌壇



〈ゲットウⅣ〉 日高理恵子

### ◆高山れおな選

秋光の碎けず唯に透きとほる  
 (筑西市) 加田 伶  
 ゆふぐれに吸うて吐く息鹿の声  
 (下関市) 内田 恒生  
 きつきちの緑色の眼虚なり  
 (横浜市) 佐藤 祐一  
 秋の声正倉院の扉開き  
 (箕面市) 中島 淳子  
 毒茸だらけの図鑑愛読す  
 (相模原市) 井上 裕実  
 手のくぼはさびしきいんげんぐり  
 (彦根市) 阿知波裕子  
 藤袴アサギマダラを呼び寄せて  
 (奈良市) 辻本 昭代  
 肌寒きスポーツの日を寝て過す  
 (広島市) 熊谷 純  
 水澄んで水泡のひとつひとつ澄む  
 (川崎市) 沼田 廣美  
 秋雨に句碑らしき石ありにけり  
 (川崎市) 小関 新

【評】加田さん。秋の日差しのあるようを執拗に言い留めた。上田五千石にくこれ以上澄みなほ水の傷つかむ。内田さん。声から想像される鹿の息、そして自分の息。交感の哀愁。佐藤さん。意味を求めて生きる人間とは全く違う生き物の眼。

### ◆小林貴子選

鶴鶴の長きファスナー閉るがに  
 (さいたま市) 伊達 裕子  
 葡萄組み立つる背骨のやうなもの  
 (佐倉市) 葛西 茂美  
 柿食えば律のその後を思い遣り  
 (一宮市) 岩田 一男  
 露の世といへど待たれるあしたかな  
 (静岡市) 久保田弘子  
 赤い羽根長と付く人みな胸に  
 (赤穂市) 矢野 君子  
 鬼太郎の親爺が踊る鳥威し  
 (長野県立科町) 村田 実  
 名月や顔向け出来ぬ事があり  
 (相模原市) 荒井 篤  
 時刻表は紙が嬉しい小鳥来る  
 (東広島市) 乙重 潤子  
 茸狩仲間ひとりも欲張らず  
 (長野市) 中沢 義壽  
 月光を天地に別れ浴びにけり  
 (北九州市) 中村テリミ

【評】一句目、地面を走る鶴鶴の動きがファスナーを閉めるのに似ているとは、言われて深く納得。二句目の葡萄の房の中心を背骨と見る比喻も冴えている。三句目、子規の妹の律は子規亡き後に勉学を積み、裁縫教師となった。芯の強い人だ。

### ◆長谷川權選

ふる里の富士が一番秋の雲  
 (三田市) 橋本貴美代  
 みちのくの秋刀魚押し戴きにけり  
 (尼崎市) 田中 節夫  
 秋風や殊に冷や酒旨き頃  
 (東かがわ市) 桑島 正樹  
 林檎剥く貧しき時代想ひつつ  
 (愛知県阿久比町) 新美 英紀  
 村祭跡継ぎのぬめ囃し方  
 (長崎市) 下道 信雄  
 霧ながら水汲む節惜しむべし  
 (富士見市) 三井 政和  
 落人の未裔として柿吊るす  
 (岡谷市) 大島 弘人  
 戦争の野蠻語るや文化の日  
 (東京都) 片岡 マサ  
 新米の名前いつしか古びたり  
 (富士市) 村松 敦規  
 俳壇の十一席や小鳥来る  
 (戸田市) 蜂巣 幸彦

【評】一席。全国にある富士山型の山。本物よりいい。二席。「押し戴き」に力あり。東北へのもろもろの思いをこめて。三席。猛暑がすぎて酒の味がわかる。よみがえるというべきか。十句目。「めげずに前向きに頑張ります」とある。

### ◆大串 章選

郷里に住む人の無く天の川  
 (日南市) 宮田 隆雄  
 釣果なきバケツに浮かぶ鱸雲  
 (町田市) 河野 奉令  
 種採つて渡して未来分かち合ふ  
 (さいたま市) 齋藤 紀子  
 一人旅色なき風を道連れに  
 (大村市) 小谷 一夫  
 爽秋の同窓会に過去未来  
 (熊谷市) 内野 修  
 年ごとに月なつかしき断かな  
 (東京都) 三角 逸郎  
 思ひ出の街を素通り秋寒し  
 (洲本市) 高田 非路  
 流されて行く先知らぬ落葉かな  
 (筑紫野市) 二宮 正博  
 蚯蚓なく固定電話はいつも留守  
 (浜松市) 桜井 雅子  
 床の間に居座つてゐる南瓜かな  
 (多摩市) 金井 緑

【評】第1句。過疎化が進み住む人が居なくなった故郷。同郷の人たちはいま何処で如何しているのだろうか。「天の川」が効果的。第2句。「釣果なきバケツ」と「鱸雲」の取合せが見どころ。俳諧味あり。第3句。「未来分かち合ふ」が言い得て妙。

## 俳句時評 ふくらみある言語世界

阪西 敦子

俳人・文芸評論家の恩田侑布子の評論集『星を見る人 日本語、どん底からの反転』（春秋社）には、2013年から発表された評論が集められている。取り上げられている作家は、松尾芭蕉から現代の作家まで幅広い。

例えは飯田蛇笏。「蛇笏賞」にその名を残す大正から昭和を代表する俳人の一人だ。自然に根差した視点と格調の高い表現でその作品が知られているが、恩田はその句境に「多声音楽」を見いだす。

「死病得て爪うつくしき火桶かな」は芥川龍之介が感嘆し、この句を剽窃して作ったとする「薔がいの類美しや冬帽子」と対比して読み解く。芥川の句が深く被った帽子と類の組み合わせを言ったのみに対して、蛇笏の句では、火鉢に置かれた病人の爪の美しさを見せたその先に、「うつくしき火桶」のつながりからその爪の置かれた火鉢へも美しさをつらね、「かな」によってその「美の奥」へ導くという、句の中の重層を指摘する。

久保田万太郎の代表句「竹馬やいろはにほへとちりぐに」には、竹馬で遊ぶ子供たちがちりばって行く様子、家路に消える様子、その友たちの行方、そして、いろはのたの無常観へと、重層を読み取る。実景から思念へ継ぎ目のない展開が心地よい。

あとがきで「よろこびは計算されない。抒情は捨てられた場所に生まれる」と恩田は書く。病の家居や子供の小さな別れを描きながらも、ふくらみある言語世界を作り出す俳句。その言葉の力を改めて捉え直し、言葉の溢れる現代における俳句の意義を問う。

## 風信

第69回角川短歌賞 角川文化振興財団主催。東京大学Q短歌会に所属する渡邊新月さん(21)の「楚樹(しもと)」(50首)に決まった。川野里子歌集「ウォーターリリー」 歌誌「かりん」編集委員による第8歌集。「睡蓮の気持ちは人類誕生以前から変はらないまま会へない人よ」(短歌研究社・2420円)

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のほか1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。